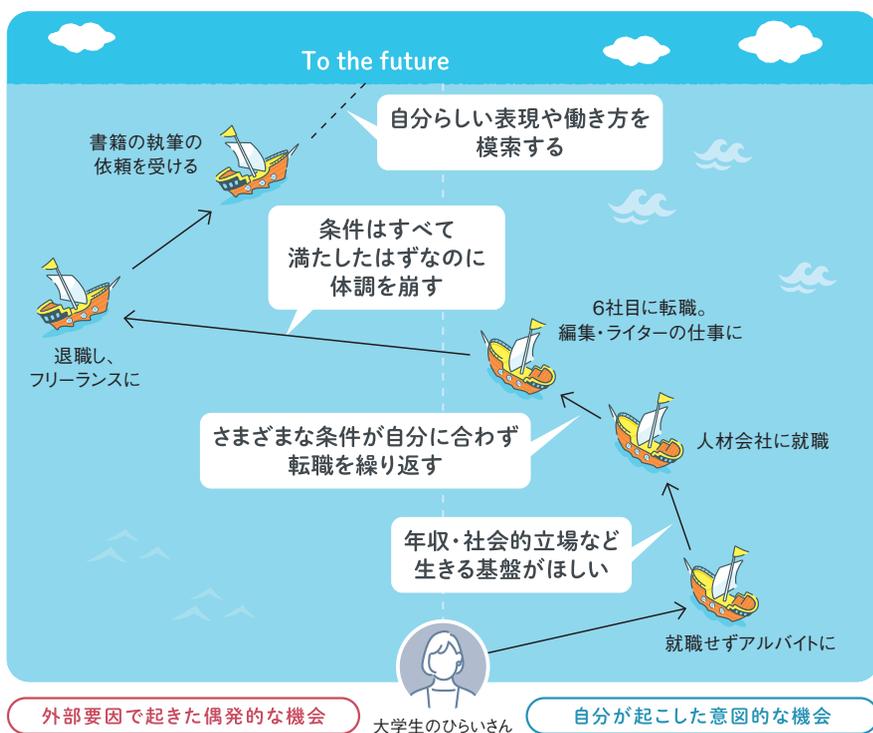


6回転職して行き着いたのは
自分の心に忠実な表現や人生の選択



＼ ひらいさんのキャリアのあゆみ ／



CASE 03

ライター、作家
ひらいめぐみさん

ひらい・めぐみ●1992年生まれ、茨城県出身。大学時代に「大好きなメロンパンを通じて、コンゴ民主共和国の紛争問題を伝える」を掲げて「メロンパンフェス」を主催。その活動を優先するため就職せずアルバイトを続けるも、健康や年収など生きる基盤を整えたいと就職。その後転職を繰り返し、現在はフリーランスでライターとして活動するかたわら作家として執筆も行う。2022年に私家版「おいしいが聞こえる」、2023年『踊るように寝て、眠るように食べる』、2024年「転職ばかりうまくなる」を刊行し注目を集める。

取材・文／塚田智恵美
撮影／澤崎信孝

「転職」はネガティブじゃない？

20代で6回転職。友達にはふざけて「転職のプロ」と呼ばれることもあります。今思えば、その根っこには、違和感をスルーするのが苦手な性格があるのかもしれない。

検事に憧れて、大学では法学部に進学。しかし教授に「法曹の仕事は、人の不幸の上に成り立つもの」と言われたことで気持ちが変わりました。今思えば、法曹界の良面ばかりを見ている学生たちに、違う視点を与える言葉だったのかも知れません。しかし私は「誰かの不幸せによってお金をもらうような仕事に就きたくない」と考えてしまつて、検事の夢を断念しました。そのころ、普及し始めていたスマートフォンに欠かせないレアメタルを生産するコンゴ民主共和国で、希少な金属が紛争の軍資金となつて紛争状態を長引かせていたり、女性に対する性的暴力が横行したりしていることを知りました。私たちの便利さや幸せは、誰かの犠牲の上に成り立っている。これに強く違和感を覚えた私は、コンゴの問題を多くの人たちに伝えるため、自分なりに動き出すことに。試行錯誤を重ねて、自分の大好きなメロンパンを切り口にしたイベントを思いつきました。

そして主催した「メロンパンでコンゴを救う」メロンパンフェスは盛況で、メディアにも取り上げられました。すると「どうせ大学生が就活のネタづくりのためにやっているんだろ」などのコメントが。誠実さを

行動で示すために、大学卒業後も活動を続けていこうと決め、就職しない選択をとりました。

イベントの活動をしながらコンビニでのアルバイトを半年続け、その後はアパレルブランドの倉庫でのアルバイトを1年ほど。しかしイベント準備との両立で、多忙を極め体調を崩してしまい、健康や年収、社会的立場など生きる基盤をちゃんとつくりたいと就職活動を開始。人材会社の営業職に採用されました。

そこでこんな言葉を聞いてはつとしました。「6回転職している人がいたとしたら、それは『6回採用している人がいる』ということですよ」この言葉を聞かなければ、のちに「転職」にネガティブなイメージをもつこともあったかもしれません。

しかし、働きながらも、日に日に「この仕事は自分に合わない」と感じるように。生じた違和感を、世間体のためにと押し殺して続けていくのは私にはできず、退職。その後はWebマーケティング、書店スタッフ、商業施設の事務局・広報と転職を重ねていきました。

いちいち違和感を抱く自分と借り物ではない自分の表現

6社目となる、お菓子のスタートアップ会社での採用面接は、他とは違いました。ネットで公開していた私の文章を読んでくれた社長が「ひらいさんのこの文章を生かしてほしい」と、自社メディアの運営や編集、ライティングの仕事をすすめてくれたのです。趣味の範囲でやってきた「文章

を書くこと」を認めてもらい、不思議な気持ちになりました。そして入社を決意。これまで「自分が苦手なことに取り組むのが仕事」と思っていた私ですが、自分が無理せずやれること、周りから求めてもらえることを仕事にしてみたら、びっくりするほど働きやすかったです。

隅田川近くにあるオフィスに通う毎日。人にも恵まれて、自分の好きな仕事をしている…。それなのに私はまた違和感を覚え始めました。職場に窓が少ないこと。会社のそばにランチを食べられるようなお店がほとんどなく、みんなデスクでごはんを食べていること。

5回転職してきて、これ以上自分にとつて居心地よく働ける会社はないと確信していました。それなのにまた私は仕事を続けられないのか？ どれも小さな気がかりじゃないか。そんなことばかり気にしては贅沢だ。そう自分に言い聞かせようとしたものの、違和感は体調に表れ、少しずつ不調をきたし始め、さらに、会社員としてさまざまな制約のなか文章を仕事にするこのつらさを感じるように。ここまで条件の良い会社でこうなるということとは、もう私には「会社で働くこと」そのものが合っていないんだ——そう踏ん切りがついて退職し、フリーランスになる決意をしました。

親が会社員だったということにも影響されていたのか、フリーランスで働くことはそれまで選択肢にも入っていませんでした。自分の意思だけで選択していたら、まづ辿りつかなかったでしょう。自分にとつ

てこれ以上ないと思うほど条件の良い会社でも、働き続けられなかった。その事実が自分に大きく作用して、現在のフリーランスの道に至りました。

2022年春にフリーランスになってからはさまざまな機会に恵まれ、依頼を受けてエッセイを書いたり、書籍を出したりしました。フリーランスは人間関係や働く環境が固まっていけないため、自分が守りたい生活を大切にしながら、柔軟に仕事内容を模索していくことができます。自分には合っている働き方なのかもしれません。

今の仕事を定義するなら、身の回りの出来事を題材に「借り物ではない、自分の心に忠実な言葉」で人に伝える仕事です。例えば慣用語や常套句は便利ですが、その表現は、本当に自分の感じたことに沿っているでしょうか。「目から鱗が落ちる」と言いますが、私に生じたのは本当に「鱗」が落ちる感覚だったか、もつと別のものではなかったか。そうやって自分の心に忠実な言葉を追究していくと、自分らしい文章になつていく。自分の心に忠実に書き続けるには、小さな違和感であっても放置してはいけません。

職場に窓が少ないことが、まったく気にならない人もいます。でも、私は気になつてしまつた。そういう小さくて確かな違和感を我慢しないことが、自分の心に忠実な表現や人生の選択につながっていく。いちいち違和感を抱く自分を「贅沢」「わがまま」と思ったこともあったけれど、そういう自分だからこそ、この道に辿り着いたのかもしれない。